

ロレンスの詩

田 中 實

1

ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) は詩情豊かな作家である。彼はイギリスの優れた作家として広く世界に知られている。彼は生涯において、長編小説12冊、中・短編小説15冊、戯曲4冊、旅行記・評論集を15冊、詩集9冊を出版している。ロレンスは小説家として有名であるが、彼の詩作品は彼の芸術活動の根底において彼の小説作品を支え、彼の生をも支えているといえよう。T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888-1965)をはじめ、同時代のイギリスの詩人や批評家たちはロレンスの初期の詩だけでなく、さらにその後の自由詩についてまでも好印象を受けておらず、酷評する者さえあった。ロレンスの死後、第2次世界大戦後だいぶ時を経てから、20世紀後半になってようやくロレンスの詩の真価を認める人も出てきたのが実状である。

ロレンスはウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-1892) を愛読し彼の詩を高く評価している。しかし、ロレンスはホイットマンの代表的な詩集『草の葉』 (*Leaves of Grass*, 1855) を讃美はするがこれにすっかり支配されているわけではない。ロレンスの詩はアメリカ詩の伝統の一部を継承しているといえる。一方、エズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) やウィリアム・カーロス・ウィリアムズ (William Carlos

Williams, 1883-1963) はロレンスの詩を認めていた。T. S. エリオットはアメリカ生まれのイギリス詩人であるが、彼がロレンスの詩を非難したとはいえ、今日ふり返ってエリオットとロレンスを比較考量すると、この2人は現代物質文明を批判し、現代社会を生きながらの死 (living death) と認識していた。ロレンスは『新詩集』(New Poems, 1918) のアメリカ版で、いわゆる自由詩 (free verse) というものを讃美している。彼の無技巧で規則にとらわれない自由な詩は、アメリカ人にとっては正統をはずれた場違いの感があったが、それがかえって読者の好評を得たようである¹。エリオットの詩が非個人的であるのに対し、ロレンスの詩は情緒的個性的な面が色濃かった。アメリカ人にとり、ロレンスの詩は自由と解放の力を発揮していると思われたようだ。

ロレンスは母を敬愛し、詩作の初期にはシェリー (Shelley, 1792-1822) に傾倒して叙情的な詩を書いた。当初、ロレンスは伝統的な脚韻を用いた。だが彼はなんとと言っても大詩人ホイットマンの偉大な魂に憧れを抱いていたのだ。ホイットマンの詩に親しむようになり再びロマン派の詩人シェリーを省みるようになった。

ロレンスは小説家としての名声が徐々に高まって行ったが、それと平行して彼は詩を書いていたのだ。彼自身はともかくとして、彼の詩作品を彼の創作活動の副産物であるかのごとく世間一般ではみなしていた。「すみれ」(“Pansies”) は今なおどうやら気晴らしで書いたものと見られている。ロレンスは実は詩作にかなりの時間を費やしていたのであり、自分の詩を彼の小説やその他の作品群の副産物とは考えていなかったようである。ロレンスは詩を書くことによって自分の経験を確認し、溢れ

¹ Jeffrey Meyers (ed.): *The Legacy of D.H. Lawrence*, p.114, - Roberts W. French: *Lawrence and American Poetry* (Macmillan Press, 1987).

出る情緒を詩の言葉に表現せずにはいられなかったのであろう。ロレンスはおよそ1000編の詩を書きおろし、そのうち150編の詩は優れた詩編であるといわれる。作詩の技法の面でも生き生きと詩情を表出している。

1928年、ロレンスは自分のこれまでの詩作品を全詩集に年代的に掲載することにした。それは彼の詩が大変個人的色彩のものであり、内的生活の伝記を形成することになると考えたからである。1908年から1911年ころの詩に彼の心情や心象をありありと描出している。彼は詩作の初期の一時期は別として定型詩の形式や脚韻、リズムにはあまり拘泥せずに作詩してきた。これは彼の芸術へ打ち込む自由な精神の表れである。

こうして、ロレンスは小説家としての創作活動のみならず、これと平行して詩人としての芸術活動をしてきたのであり、彼の詩作品が成熟を見せた時期は小説作品が成熟を見せた時期とほぼ同じころであった。彼の詩はおのずから湧き出ずる感情の表出であったので、彼は美的(aesthetic)という言葉を使いたがらなかった。この語は技巧性を感じさせるからである。彼の情緒的精神的な詩作は言語のあるがままの自然な表出なのである。

第1次世界大戦中、ロレンスは人間性や人間の未来が信頼できなくなり絶望していた。折しも彼は鳥や獣や花など人間以外の世界へおのずと向かって行き、彼の精神の正常さや生への信頼性回復へと趣くのであった。文明に穢されない天然の世界の鳥や獣や花に未知の他者としていわば自然界の神々を見る思いで詩作に耽るのであった。ロレンスは言葉以前に光を発する神を見るのだ。人間の言葉のない動植物の世界にそれを見るのである。鳥や獣や花がそういう神の使者に思えるのである。彼は自然界に浸ることによって、現代物質文明という絶望的な病弊を自覚しながらも生を肯定しようとするのだ。

ロレンスは晩年に死に関する詩を書いている。彼は死を意識してか、死というものを生の一部として捉えるようになるのだ。これはいわば人生の悟りの境地に近いといえよう。だがそうは言っても、彼にとり死は最も重大な出来事であり、途方もなく長い旅路なのである。

2

まず、ロレンスの初期（1906－13）の詩を検討する。

- (1) Oh but the water loves me and folds me,
Plays with me, sways me, lifts me and sinks me, murmurs: Oh
marvelous stuff!

(p.34, "The Wild Common")²

(1)では water（水）を主語にして状態よりは動作に重きをおいた他動詞の love（愛する）や fold（抱く）、play（遊ぶ）、sway（揺り動かす）、lift（持ち上げる）、sink（沈める）を羅列している。いわゆる動作動詞（actional verb）多用の動詞的文体（verbal style）により、活気のある動的（dynamic）な散列文（loose sentence）を構成している。口語的（colloquial）でもあり、平明体（plain style）ともいえる。

水があたかも生き物のごとく他動詞の主語として人称代名詞（personal pronoun）の目的語（me）に働きかけている。水になぞらえた擬人化（personification）である。物活論（animism）的な見方に基づく

² V. Pinto and W. Roberts (ed.): *The Complete Poems of D. H. Lawrence* (Heinemann, 1972)の頁数と詩の表題を示す。

比喩表現を効果的に用いている。水は水色であるが白い水しぶきを上げて「私」と戯れている。そして光と影を表出している。私 (me) という人物が水大好きという心情が横溢している。水に抱かれるような気持ちで水と楽しく戯れている。「私」は水に揺さぶられたり、持ち上げられたり、沈められたりしている。仮定法過去を用いて、あたかも水が脈打つ血液であるかのように喩えられている。その血潮は「私」を抱擁して、あえぐ女性のようなのである。まさに水は「私」の恋人のような愛の濡れ場 (love scene) の描写である。ロレンスはこの水を通してかけがえない自然への愛を示唆している。ロレンスの愛する自然と人間が溶け合い、渾然一体となっている。彼はヘンリー・ジェームス(1843-1916)とは対照的に、自然をぬきにしては語れない芸術家である。上掲の詩行は人間が自然の一部であることを如実に物語っており、彼の原始主義の一端を窺わせている。ロレンスには、人間中心主義とはいえない、人間を超えた美学があるように思われる。自然をふまえての、さらには超自然的な美の追求がみられる。

(2) Outside the house an ash-tree hung its terrible whips
And at night when the wind rose, the lash of the tree
Shrieked and slashed the wind, as a ship's
Weird rigging in a storm shrieks hideously.

Within the house two voices arose, a slender lash
Whistling she-delirious rage, and the dreadful sound
Of a male thong booming and bruising, until it had drowned
The other voices in a silence of blood, 'neath the noise of the ash.

(p.36, "Discord in Childhood")

(2)では第1連において、家のそとの様子を謳っている。まず1行目で、ash-treeを主語におき、他動詞hungの目的語にwhips(ムチ)を隠喩的(metaphorical)に用いている。2行目ではwhen節(従節)の主語に自然現象のwindを主語とし、主節の主語lash(むち打ち)が悲鳴をあげ(shriek)、風を打つ(slash)様子を謳っている。4行目では索具の音(rigging)が叫び声をあげる(shriek)様子を述べている。擬音語(onomatopoeia)の動詞shriekを2回用いている。Shriekの類語にscreamがある。擬音語は語根創造(root-creation)と呼ばれるもので、語源的に最初、自然界の音を表すために造られた語である。擬音語を用いることにより、外界の自然な様子を如実に描写している。

戸外は風がすさまじい勢いで吹いている。この第1連には人間は登場せず、第2連に対する客観的相関物(objective correlative)をおいている。要するに、戸外が風のない静かな、星空の見えるような上天気ではない。風が怒り狂って吹き荒れているのだ。屋外の描写により屋内の不穏な状況を暗示している。第2連ではまず2つの声が起こったことを告げる。鞭のメタファ(metaphor)により子供の親たちが烈しく口論している様子を描いている。怒り狂う家族の一方(弱者)はもう一方(強者)の、それ以上の怒鳴り声によって打ち負かされて沈黙に陥る。これは子供には辛いトラウマを残す大人たちの家庭内暴力騒動の描写である。

ロレンスは実生活において、恩師の妻フリーダとの略奪愛が成就し、至福の心境であった時、『われらは生きぬいた』(*Look! We Have Come Through!*, 1917)にある、2人の愛を謳った「ヘネフにて」(“Bei Hennef”)から、二連をあげる。

- (3) And at last I know my love for you is here;
I can see it all, it is whole like the twilight,

It is large, so large, I could not see it before,
Because of the little lights and flickers and interruptions,
Troubles, anxieties and pains.

(p.203, "Bei Hennef")

(3)では男性(ロレンス)が女性への熱愛を確認している。いまその愛のすべてが見えるのだ。ただし、たそがれ(twilight)のように完全だという直喩(simile)により表現している。ふつう「たそがれ」という日本語は比喩的には物事の終りに近づき衰えの見える頃をイメージする。つまり人生の盛りを過ぎた年代の意味に用いる。本来、英語の twilight (たそがれ)も日暮れの空の薄暗くなりかけた頃の意味である。昼とも夜ともつかない曖昧な時間である。したがって必ずしも手放しで明るい愛ではないことを、愛の行く末の曖昧さ(ambiguity)を物語っている。この twilight (たそがれ)という語によって、若い男女の愛の苦しみが欠落しているような愛、恋愛至上主義的な愛とは異なるものであることを示唆している。暗い苦渋のみの愛でもないのだ。ある種の不透明な波瀾を内蔵した愛なのである。以前には見えなかった愛であるのは、小さな光であり、きらめきだからである。その愛の陰に、妨害や悩み、不安、苦しみがあつたからなのである。ちなみにヘンリー・ジェイムズ(Henry James, 1843-1916)の『ある婦人の肖像』(The Portrait of a Lady, 1881)の中で、イザベルがロンドンの夕暮れを楽しむシーンがある。夕暮れが好きなのだ。1日が始まる夜明けや朝が好きなの人もあれば日中が好きなの人も、夜が好きなの人もあろう。たそがれ時は昼でもなく夜でもない、それらの中間なのである。移ろい易いひと時である。ロレンスは愛が流動的で移ろい易いものであることを示唆しているのだ。

「ヘネフにて」の次の連は、男女間の愛のかたちが構造的、内容的に

美事な例である。

- (4) You are the call and I am the answer,
 You are the wish, and I the fulfillment,
 You are the night, and I the day.
 What else? it is perfect enough.
 It is perfectly complete,
 You and I,
 What more –?

(p.203, “Bei Hennef”)

(4)では男女の相思相愛を謳っている。2人称の You は女性で、男性を慕い、男性に声をかける。男性はこれに答えている。「あなた」がお願いすれば、「ぼく」はその願いをかなえてあげる。まかせておけという大らかな態度なのだ。陰喩的に「あなた」が「夜」で、「ぼく」は昼なのは、夜は暗いイメージであり、悩みのある女性なので、「ぼく」は昼のように明るく相手の悩みの相談にのり、解決へと熱心に努力をする存在なのである。男性は女性に自信を示して女性をリードしなくてはならないという、ある意味ではロレンス自身、因襲的、伝統的な男女の関係をほのめかしているといえる。男性はその意味で意志強固でなくてはならないのである。こうしてロレンスは昼と夜、光と闇の二元論 (dualism) 的に対比し、比較対照して事象を認識しようとするのだ。英語自体の文構造は S (主語) + be + C (補語) の節をいくつも連続して用いているので文の流れがリズムカルである。

3

次に『鳥と獣と花』(*Birds, Beasts and Flowers*, 1923)の中の「イチジク」(“Figs”)からの詩行をあげる。

- (5) The Italians vulgarly say, it stands for the female part; the fig
fruit:

The fissure, the yoni,

The wonderful moist conductivity towards the centre.

(p.282, “Figs”)

(5)におけるイチジクの実は女性の陰部 (private part) を表すとイタリア人は言う。裂け目 (fissure) とか女陰 (yoni) とかをメタフォリックに象徴している。そしてロレンスは女性の局部を、性関係における中心へ導く驚嘆すべき誘導性だと表現している。代名詞 it は予備の it (preparatory it) としてまず主語におき、真主語 (the fig fruit) を外位置 (extraposition) において強調している。

- (6) When Eve once knew in her mind that she was naked
She quickly sewed fig-leaves and sewed the same for the man.
She'd been naked all her days before,
But till then, till that apple of knowledge, she hadn't had the fact
on her mind.

(p.284, “Figs”)

(6)に見られるように、イヴは心の中で自分が裸だと知った時、すぐさ

まいちじくの葉を縫った。アダムにも縫ったのである。アダムとイヴはイチジクの葉をつづり合わせて腰に巻いたのである。2人はそれまでいつもずっと裸だったのだ。あの知恵のリンゴを知るまで、その事実気づかずにいたのである。神話的には、蛇の誘惑に負けて、禁断の実(知恵のリンゴ)をイヴが先ず食べ、次いでアダムもこれを食べたことにより、それまで裸だったアダムとイヴは自分の裸体の恥ずかしさを知ることになるのである。

こうして、ロレンスはこれを書いたころには、キリスト教というものにあまり疑問を抱いてはいなかったかのように表現している³。ここでは人間が動物のように生まれたままの姿で暮らすものではないことを示唆している。裸の恥ずかしさを衣服という被いによってカバーして人間は文明化して行ったのである。隠喩的に聖書の話をつまれば、今日的にも十分成り立つ話である。人間は有史以前から他の動物にはない知恵や聡明さを獲得してきたのである。

原始時代からこのかた人間が文明化(civilize)してきた過程において、類人猿(ゴリラ・チンパンジー・オランウータン)や猿のような毛皮を、人間はからだ全体にわたって徐々に無くして行った。性的なシンボルとしての傷つきやすい急所を大事にし、生殖と排泄の器官を露わにしておくことに羞恥心を抱くようになり、衣服を身に纏うことを発案したのであろう。

ロレンスは詩の創作においても、小説の創作においてと同様に人間男女の結びつきを追求することを怠らなかった。男女両性は肉体的精神的な愛によって至福の境地に至るのである。ロレンスは人間の生命を燃焼

³ Sandra M. Gilbert: *Acts of Attention: The Poems of D. H. Lawrence* (Cornell University Press, 1972), p.145.

させながら魂の救済を志向している。詩の中でも男女の性衝動や性愛の真摯な究明と描写をしている。こうして人間の内的自然のあるがままの発露を重視している。

人間の男女はそれぞれ自由であり、かつ結ばれる。だが愛する花は他から束縛されずに自由であり、動機も目的もなく咲いてほしいとメタフォリックに女性の理想的なあり方を表現している。花はそれ自体咲きほこるだけでよいとロレンスは考える。そこで「アーモンドの花」(“Almond Blossom”)の一節をあげる。

(7) Unpromised,
No bounds being set.
Flaked out and come unpromised,
The tree being life-divine.
Fearing nothing, life-blissful at the core
Within iron and earth.

(pp.306-7, “Almond Blossom”)

(7)では自分と相手やその他の者が自然とのかかわりを謳っている。花がどんなものにも束縛されないで自由に咲いている。そして花びらは自由に散ってゆくがまた咲くのだ。アーモンドの木は聖なる命の尊さに満ちている。この木は何も恐れない。この木の中心の核は生命の悦楽に満ちみちている。本源的な母なる自然に根ざすアーモンドの木は聖なる本然の姿なのだ。こうしてロレンスは生涯詩を書き続けたが、彼にとって作詩は純粹な芸術活動であると同時に彼の日常生活の確認でもあったろう。

4

ロレンスは結核に冒されながら詩を書き続けて、『最後の詩集』(*Last Poems*, 1930)が刊行されるに至る。この詩集の中の「タイアの男」(“The Man of Tyre”)では、ある男が黒髪の女に会う。

- (8) Oh lovely, lovely with the dark hair piled up, as she went deeper,
 deeper down the channel, then rose shallower, shallower,
 with the full thighs slowly lifting of the wader wading shorewards
 and the shoulders pallid with light from the silent sky behind
 both breasts dim and mysterious, with glamorous kindness of
 twilight between them
 and dim blotch of black maidenhair like an indicator,
 giving a message to the man —

(p.693, “The Man of Tyre”)

(8)では、黒髪の女性が浅瀬の方へと水中をゆっくり歩く姿を描写している。ほの暗い神秘的な乳房は魅惑的で、黄昏の優しさを湛えていたのである。女は内的な性のメッセージを送っていたのだ。

ロレンスは油彩や水彩の趣味があり、裸婦を描いたり、裸の男性像等、男女の裸体画を画集になるほど多数残している。これらの裸体画の人物群像は彼の詩や小説と平行し共通した人間観に基づくものと思われ。高度に発達した都市文明に浸蝕されていない人間性への回帰や憧憬が、彼の芸術観の根本にある、彼の原始主義であろう。

人間性本来の姿、おのずからなる、自発的自然発露的 (spontaneous) な人間行動や男女の人間関係を、ロレンスは理念として志向しているも

のと考えられる。ロレンスは草花を愛し、リンドウやシクラメン、三色すみれ、アネモネなど多くの草花を彼の詩や小説のなかに表現している。ちなみに、日本では詩人の西脇順三郎が草花に興味を抱き、植物採集を熱心に行い、詩やエッセイの中にアザミやナナカマド、アカノマンマ、ジュンサイなど多くの種類の草花をよく登場させている。西脇は日本でロレンスを高く評価している英文学者の1人である。西脇は晩年、自分はむかし超自然であったが今は自然であると語っている。

ロレンスは古代ギリシャの神々に深い関心を示したが、キリスト教もふくめて既成の神々に疑問を抱き、彼独特の神の概念を想定しているように思われる。

- (9) God is the great urge that has not yet found a body
but urges towards incarnation with the great creative urge.

(p.691, "The Body of God")

(9)では神とはどういうものかが謳われている。主語に神 (god) をおき、主格補語 (subjective complement) には抽象名詞 urge (衝動) をおいている。神とはまだ肉体的存在となっていない状態なのだ。偉大な創造的衝動によって、肉体的存在へと駆り立てるのだ。神はあらゆる事象、事実の根源をなすものである。タイトルが「神の体」("The Body of God")であるが、神は可視的具体的人格的存在ではないのである。神は観念的抽象的存在なのである。そして神は霊的に遍在するものである。また、ロレンスの神は既存の神ではなく、まだ特定の神ではないのである。ロレンスは古代からこのかたギリシャの神々をはじめ多くの神々を渉獵しているのであり、あえて言えば、一切万有が神なのであり、汎神論的な神であろう。美をもっているあらゆるものが神なのだとい

う。万有神論であり、一神論とは対立するものである。ソクラテス以前のギリシャ思想が汎神論であり、スピノザやゲーテや武者小路実篤も汎神論的宗教観の持ち主である。しかし、ロレンスはキリスト教的ヨーロッパの風土に生まれ育ったのであり、その見えざる宗教的思想的影響は否めないであろう。ロレンスは文学者として、詩人・小説家として、現代社会のあらゆるものに関心を抱き、想像力を働かせて、独自の思想や宗教観を構築しようと模索しているのだ。

最後に、ロレンスの最高傑作といえる「死の舟」の詩行をあげる。

(10) Have you built your ship of death, oh have you?

Oh build your ship of death, for you will need it.

(p.979, "The Ship of Death")

(10)では詩人は死の舟を造ったかと尋ねる。そして、いずれ必要となるから造れという。死の舟とは何か。一般に人生をいかに生きべきかと問う書物は多いが、人生、いかに死すべきかと問うことは少ないであろう。だが人間は好むと好まざるとにかかわらず、いずれ人間は死ぬ、それゆえに己れの死への心の準備をしなくてはならないのである。

(11) Now in the twilight, sit by the invisible sea

Of peace, and build your little ship

Of death, that will carry the soul

On its last journey, on and on, so still

So beautiful, over the last of seas.

(p.979, "The Ship of Death")

(1)では人生のたそがれ時に目に見えない平穏な海辺に坐り、それぞれの小さな死の舟を造れという。この舟は最後の旅で魂を運んでくれるのだ。海の波を乗り越えてどんどん先へ進行する舟、いとも静かな、いとも素敵な旅なのである。

(12) Ah, if you want to live in peace on the face of the earth
Then build your ship of death, in readiness
For the longest journey, over the last of the seas.

(p.980, "The Ship of Death")

(12)では、地球上で平穏に暮らしたいのなら、大海原の波を越えてゆく、死という悠久の旅の用意をして、死の舟を造りたまえと諭すのである。人生は生死の葛藤であり、一日一生であるからだ。芸術は長く人生は短し、光陰矢のごとしといわれるゆえんである。

以上のようにロレンスの詩を分析・検討してきたが、彼の詩作は、彼の小説の創作や彼の絵画の製作と同工異曲であり、彼の人生そのものとも根源的に一如なのだと考えられる。ロレンスは小説の創作と平行して詩を書いてきたが、最初は定型詩であった。そして彼の個人的経験にもとづいて情緒的な詩を書いた。例えば、(1)では巧みな擬人法を用いて水と戯れている様子を表現している。(2)の「幼時の不協和音」では家庭内での両親の不和を詩に表現しほのめかしている。炭坑夫の父と知性的な母との喧嘩の模様と思われる。前半に客観的相関物をおくことによって詩の表現を効果的なものにしていく。次いで、ロレンス自身の恋愛体験を詩に表現している。「ヘネフにて」では互いに愛し合う2人の心情を美事に謳いあげている。たそがれ (twilight) という言葉が表すように、

いわば移ろい易い愛なのである。

さらに好評を博した詩集『鳥と獣と花』では例えば、「イチジク」の中で、イタリア人がイチジクは女性の陰部 (private part) を表すのだと述べて、イチジクを性的象徴として隠喩的に描写している。ロレンスの詩には小説作品と同様に性的象徴の描写や大胆な男女の性的関係を示唆する表現が少なくない。「アーモンドの花」では、花がなにものにも束縛されないで咲いている様子を讃えている。人間の男女も愛し合っているながら、もう一方においてお互いに自由でありたいのだということをロレンスは示唆している。

『最後の詩集』中の「タイアの男」では、黒髪の女の乳房を描写し、ふくよかな女性の魅力を浮き彫りにしている。「神の体」では神は具体的な肉体をそなえたものではなく、偉大な創造的衝動であると述べている。ロレンスはキリスト教やギリシャの神々などから影響を受けながらも、彼独自の宗教観をうち立てようとしているのだ。最大の傑作といえる「死の舟」は、ロレンス自身が結核の病魔と闘いながら、詩その他の創作活動を行っていた頃の作品である。彼は自分の生命の燃焼が尽きようとする予感を抱いていたに違いないのだ⁴。それゆえに「死の舟」は真に迫るものがある。彼は詩の中で、死という永遠の眠りの準備をしてこそ現世で心穏やかに暮らせるということを示唆している。こうして、ロレンスは20世紀イギリスの極めて優れた詩人・小説家 (poet-novelist) であるといえる。

⁴ Ross C. Murfin: *The Poetry of D.H. Lawrence: Texts & Contexts* (University of Nebraska, 1983), p.238.